岡山大学大学院医歯薬学総合研究科消化器外科学¹⁾、腎不全センター幸町記念病院外科²⁾
腎不全センター幸町記念病院内科³⁾

○松田浩明¹⁾²⁾、宮崎雅史²⁾、岡 良成²⁾、高津成子³⁾、宇野 太¹⁾
近藤喜太¹⁾、吉田亮介¹⁾、信岡大輔¹⁾、丸山昌伸¹⁾

【目的】 透析専門施設の治療目標は維持透析期間を最長にするとともにPTAを含むバスキュラーアクセス(VA)関連修復術回数を最小にすることである。VAの累積二次開存率は単に開存を示すものでVA関連修復術の回数を加味してないためVA機能維持の評価として不十分である。透析期間とVA関連手術回数との相関からVA管理法の妥当性を検討。

【方法】 1991年1月から2010年12月までに幸町記念病院で維持透析治療を受けた648例。VA開存期間(AVF、AVGの一次、二次開存率)の算定と透析期間とVA関連手術(VA作製手術+VA修復術(PTAを含む))の回数との相関について単回帰分析を施行、単回帰直線(VA関連手術回数=回帰係数×透析期間+定数項)を割出。

【結果】 AVFの一次、二次開存率は、5年で54.6%、56.9%、AVGの一次、二次開存率は5年で27.1%、

45.6%でガイドライン到達目標値を達成。透析期間とVA関連手術回数間には正の相関があり、患者全体では1.72回/5年、2.20回/10年、3.16回/20年。原疾患別では慢性腎炎(275例)で1.58回/5年、2.11回/10年、3.16回/20年、糖尿病性腎症(235例)では、1.84回/5年、2.61回/10年、4.15回/20年、腎硬化症(46例)では、2.09回/5年、2.71回/10年、3.94回/20年、慢性腎炎に比して糖尿病性腎症で回帰係数が大きく、透析期間が長くなるほどVA修復術回数が増加する傾向あり。腎硬化症では回帰係数、定数項とも高く、透析開始早期にもVA修復術を必要とする傾向あり。

【結論】 透析期間とVA関連手術回数における単回帰直線の傾きである回帰係数は透析期間中のVA修復術が少ないほど小さくなり、手術、透析関連技術等を含めたVA管理成績の指標の一つとなり得る。VA開存の評価に際しては修復回数も考慮すべきであろう。